

# 農業小学校



参加者全員を集めてお手本を見せる。皆さん真剣です。

土との触れ合い、人との出会い  
私にとってのグリーンツーリズムは、「土との触れ合い」と「人との出会い」です。原野を開拓した先人の汗の結晶である豊かな農地。農地から生まれる恵みを糧とする私たち。でも今、都市と農村、消費者と生産者が分け隔たりあっていきたくないと思います。

農業とは「いのち」を育む産業

平成元年、私は北海道自立推進協議会主催の「移動村づくり大学」に参加しました。ものの考え方を学ぶこの農業研修は、今までの私の農業観を根底から変えるものとなりました。「農業は、いのちを育む産業」との教えに、生産性のみを追求していた自分の農業に疑問が生じました。農産物が「いのち」の基となること。これはごく当たり前のことですが、飽食の国また時代と言われる中で私たちが失ってきた概念ではないでしょうか。それでは、「いのち」ある農産物とはどのようなものでしょうか。それは、安全で、美味しく、安心できるもの。それがあって初めて私たちの「いのち」が保障されます。

そこで、「安全の追求」のために有機農業を始めました。科学物質によって土を汚さないためです。有機農業の畑には、有用な微生物がたくさんいなければいけません。まず初めに基本である堆肥作り。ミネラルのバランスを整える土作りから始めました。

そして、「美味しさの追求」には、畑で完熟させることです。トマトなら真っ赤になるまで樹で熟させて、野菜の持つ本当の美味しさを引き出します。形にはとらわれず、味が基準です。既存の流通では収穫後から消費者へ届くまでかなりの時間がかかります。直接消費者へ販売する産直で、とれたての味を知ってもらいました。

さいごに「安心の追求」は、消費者に直接畑で野菜を摘み取りしてもらうことです。野菜の生育状態を自分の目で確かめながら、栽培方法なども直接理解してもらいます。

これら一つ一つの積み重ねをもとに、今年度から「農業小学校」を開校することになりました。

## 「由仁ふれあい農業小学校」開校

農業小学校は、先進地である府県の取り組みを



慣れない手つきの参加者を手ほどき。質問や相談がその場でできるので、心強いと参加者談。

参考に、5月から10月まで隔週で12回の授業を行うことにし、「由仁ふれあい農業小学校」と名付けました。農作業を通して自然の仕組み、農業の役割、命の大切さを学ぶ体験教室です。小さな種を蒔き育て、豊かな実りを迎える感動を学友みんなで共有することを目的としています。

大人から子供まで58組110名の方が、3クラス編成で学びました。入校式では農業体験への抱負を皆さんに語ってもらい、「都市に住んでいると土に触れることがない、何かもの足りなさを感じている」、「昔、実家が農業を営んでいて、思い出がある」、「子供たちに経験させたい」、「自分で種を播き、収穫した安心な野菜を食べたい」、「北海道へ移住してきたのだから、ぜひ農業を体験したい」と、皆さんの熱い思いが伝わってきました。実践の場合は、自分たちで管理する「オーナー畑」とみんなで作業する「共用の畑や田んぼ」です。

## うれしい、楽しい農作業体験

まず畑を耕すことから授業は始まります。慣れない鋤（すき）を使い、額に汗する作業です。臭う有機質肥料散布もこなします。畑の整地と畝（うね）作りが終われば、いよいよ種まきです。初めて見る小さきまきまき野菜の種を、早く芽が出てと祈りながら土に落します。畑の上では大人と子供、女性と男性も力を合わせて作業しなければいけません。



参加者の親子。普段の会話で農園が話題になることもある、とお母さん。



オーナー畑の草取りが1日のまず最初の仕事。

病害虫の被害で芽が出なく、悲しい思いもしました。自然と向き合う厳しさを感じました。でもあきらめないでまきなおします。大地はチャンスを何度でも与えてくれます。

そして、うれしい初収穫はラディッシュとべんり菜でした。その他、しっかりと根を張った大根はなかなか抜けずに、苦労しました。抜き取った大根が曲がっていても二股になっていても、自分で育てたいとおしい野菜は、とても美味しく食べることができました。みんなが一番収穫を待ち望んでいたのは、とうもろこしと枝豆です。背丈以上に成長したとうもろこし。たくさんの実を付けた枝豆。一粒の種からの大きな贈り物です。

また、田植えの時は素足で田んぼに入るので、今まで味わったことのない感覚を体験しました。でも慣れると意外と気持ちがいいものです。水田も無農薬で育てているので、農薬を使わずに手で草取りをしました。最初は稲とヒエの違いが判らず、間違えて稲を抜いてしまい大変でした。稲刈りの時は私の両親が先生役になって子どもたちを指導してもらいました。刈り取った稲をワラで縛るのは、合理的ですがコツがいります。忘れかけている先人たちの知恵を再確認した時でした。

その他に、小麦を刈り、パンを焼く授業もあります。鎌で刈り取り、足踏み脱穀機で殻をはぎ、唐箕(とうみ)をします。昔ながらの麦刈りは、作業手順をみんなで決め、連携プレーが必要です。手作業で行うと、こぼれた一粒の麦でも大切にするようになります。パン作り教室は、地元のパン屋さんの協力で行いました。ふすまの入った少し茶色い小麦粉を使い、全粒粉の高い栄養価について説明し、その焼きたてのパンの美味しさに感動しました。

農園内の自然観察も授業の一環です。田んぼの雑草「ミズアオイ」の華麗な紫色の花に心奪われる人がいます。また子供たちは、カエルやトンボ

などの小さな生き物たちを追いかけます。しかし効率を追求した近代農業の発展は、小さな生き物の住みかを奪ってしまいました。私が子供の頃の昭和40年当時、いつも追いかけていた昆虫や川魚が姿を消しました。機械化や農薬の影響もあるでしょう。林や沼が消え去り、コンクリートに囲まれた川が主流になりました。彼らが再び戻ってくれたなら、私たちにとつてどれだけ癒しになるか。都市と農村交流の仲立ちは、これらの小さな生態系があつて、深まっていきます。これからは自然に優しい開発が私たちの憩いの場を提供してくれることでしょう。

### グリーンツーリズムは探しものを見つける旅

これからは、農業小学校スタイルのグリーンツーリズムを提案します。誰にでもでき、誰もが参加しやすい取り組みだからです。我々は、ありのままの農村でお客様を迎えましょう。都市の人たちは、私たちと違った感性で農村を見つめるので、見るもの、聞くもの全てが驚きの連続となるでしょう。そして、いつの間にか忘れかけていたことを思い出し、新たな発見がある旅となることでしょう。探しものが見つかった旅は思い出に残ります。

都市の子供たちにとつては、農村での体験が「食農教育」として役立ちます。自分のまいた野菜



お手本を見逃すまいと真剣に見つめる参加者たち。

を育てる喜び。収穫の時は自然の恵みに感謝する心が芽生え、「いただきます」の意味を知ることとなります。食べ物を大切にすることで、人に対する思いやりの心が芽生えます。

大人たちにとつては、利便性を追求してきた中で失ってきた本物の味を知ることが出来ます。畑で完熟した野菜を手にとるとき、自分でも作れた喜びが沸き立ちます。天気が悪くなると自分の野菜の生育が気になります。私たちが四季の移り変わりと一緒に生きていることを感じ取ることが出来るでしょう。

参加者の中には、農業小学校の体験をきっかけに本格的に畑を買い求め、菜園を始めた方がいます。若い夫婦は来年おばあちゃんの畑で野菜を作るそうです。移住して田舎暮らしをしたいという希望者も出てきました。

参加者の探しものは様々です。また、農業小学校で見つけたものも様々でしょう。しかし、共通して言えることは、野菜を作るといことが案外身近であったこと、農村の風景や風に心地よさを感じたこと、そして人と人との暖かい出会いを感じたことです。

今回は子供から大人まで一緒にクラス編成でした。今後は子供たちだけのクラスや親子参加のクラス、また家庭園芸家を目指す人のクラス編成も検討したいと思えます。

みなさんも農村に何かを見つけに来ませんか。土の上だから、人がいるから。忘れかけていたことを一緒に見つけましょう。

ふれあい体験農園みたむら園主 三田村雅人

唐箕(とうみ)がけ：昔の農具で、風力を使った選別機を唐箕といい、これで穀物の美と殻やチリなどを分ける。唐箕を回す速さは、一定でなければならぬので、コツがいる。